

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 25 年 11 月 30 日発行 第 29 号

大学と災害を考える ～シンポジウム「自然災害と大学」～

11月1日(金)、シンポジウム「自然災害と大学」が石巻専修大学で開催されました。東日本大震災において最大級の被害を被った石巻市。復旧・復興の拠点として、石巻専修大学が活躍しています。そこで、これまでの災害時における大学の役割を反省し、それをきっかけに大学が今後、地域の防災や復興・教育に貢献できるのかを「学生主体」とした教育、「大地連携（大学と地域の連携）」、「体験型」をキーワードに考えていこうという企画です。

始めに外部から3名をお迎えし、専修大学教授の大矢根淳先生には「自然災害後の地域社会と大学」、愛知学院大学教授の田尾雅夫先生には「阪神・淡路大震災とその後の大学」、インドネシア・シアクアラ大学教授のトーフイック・サイーディ先生には「スマトラ沖地震・津波とその後の大学」、それぞれ過去を振り返り、大学と災害・地域の関係の現状を説明して頂きました。

大矢根先生のお話について、「復興」の遷移では、1995年の阪神淡路大震災における生活再建を意味する「生活復興」という言葉で使われることになったことが大きなきっかけになった事を初めて知りました。この内容から来ているように、これからの災害からの「復興」というものは単にインフラの再生（＝既定復興）というのではなく、地域によって大きく違うであろう地域単位、個人単位までの人間関係に大きく踏み込んだ再生、そして、ライフスタイルを内面に秘めた再生（＝創造的復興）というものが必要とされてくると理解しました。

このような復興において大学は重要な役割を果たす事が分かりました。特に情報の蓄積・運用においては効果が発揮できる事が分かり、その責任は私達学生にあると感じました。また、新たな災害こそが次の自然災害の減災につながるとおっしゃっていた事が印象的でした。

田尾先生のお話について、阪神淡路大震災のときは、今回の東日本大震災のように地域の大学は関心があつたわけではないようです。しかし、周辺の大学は大きく建物が倒壊する被害がありました。当時学生は冬休み中ということもあり、ボランティアに参加する学生。この報道が連日行われ、ボランティアがこの時から注目されるようになったようです。大学側としてもこれによって災害に関するその役割について関心が高まったようです。しかし、学生ボランティアは一時的であり、大学のスケジュールとも関係が深かったようです。その後、結果としてこのような事に関連の深い講義が開講されるようになりました。大学は地域の減災ができる役割があ

ることがわかりました。

スマトラ沖地震の事例をお話していただいた、トーフイック・サイーディ先生によると地元のシアクアラ大学が震災後の復興プランを独自に考案しました。また、それを政府に提出して、その多くが政策に採用されるなど、私達の大学以上に影響を与えており災害後の復興に大学が大きく貢献していた事が分かりました。

坂田学長は地域との連携の実践と実績にうろたえず挑戦していくこと、そして地域とともに再生する意思があること、を述べられました。

災害の教訓としてまとめが行われました。

- ・防災に関する大学の研究所・大学院の設置がなされた。（スマトラの事例より）
- ・我々の大学を含め、今後の災害からの復興・発展に大学が寄与する事は社会的責任である。防災についてこれからは継続して考えていき、災害に関する情報を伝えていく責任がある。
- ・災害の風化はどうしても避けられないから、そうならないための活動が何年続けられるかが問題である。これは大学側が率先して災害後も関心を持ち続ける事が大切である。
- ・「津波でんでんこ」について、マニュアルを作成して皆に紹介するべきである。その由来については、2通りに考えられる。災害から皆が生き残る方法を伝えている。そして、その災害から自らが生き残ってしまった自責の念を和らげる役割がある。
- ・災害に関して記憶を記録し地域社会へ問いかけていく場としての大学がこれからは求められる。
- ・被災の情報を分節化して分析を行う事こそが教訓になりうる。そういった知識を格納するそして地域に提供していく場でもある。

この他にも多くの教訓が意見として出されました。どれも大切なことであり、私達学生がこれからは継続して頑張っていかななくてはならないと感じました。

私達石巻専修大学の学生も2人参加して自らの体験を述べました。語り部としての体験談やボランティア活動への参加の体験談を地域の皆様に聞いて頂きました。会場の様子も真剣であり、多くの賛同を得る事が出来るものでした。

最後の意見交換会では1. 大学と震災の教訓、2. 大学と自然災害教育、3. 大学と地域復興という形で議論が行われました。これからは地域復興に取り組み貢献する大学が求められており、地域の魅力を発信し続け、周囲の関心を集め続けて風化させないことが重要だということがわかりました。

以上でシンポジウムは閉会となりましたが、今回は非常に良い機会となりました。短い時間の中で多くのことを教えていただきました。そして、今後も東日本大震災を忘れないためにもこのような機会を設けていくべきだと強く感じました。

(志賀洋太)

*本シンポジウムは平成 25 年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業「東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築」（代表＝小田隆治山形大学教授）による。主催：石巻専修大学 FD 委員会。協力：石巻信用金庫、石巻地方の事業所・住民を支える企業グループ、宮城県東部地方振興事務所。

南三陸町復興の中の経営者 ～ホテル観洋阿部憲子女将にうかがう～

「これまで地域のリーダーとしてがんばってきた経営者への支援が十分ではありません」

これは、11月2日、南三陸町のホテル観洋の阿部憲子女将から私がうかがったことです。

南三陸町は大震災で大きな被害を受けました。避難場所とされていた防災庁舎で町職員を含む多くの犠牲者が出たことは広く報道されています。すでに若者の人口流出が進んでいるそうです。

ホテル観洋は太平洋を臨む崖に立地しており、津波後も建物の上階が残り、被災者の避難場所となり、その後も復興事業の中心的宿泊施設となっています。眺望の良いホテルとして2011年に「プロが選日本のホテル・旅館100選」の17位に入っていました。創業者である先代社長は眺めの良さだけでなく過去の災害をふまえ固い岩盤の上の立地を選んだそうで、津波の際には崖の上という位置により建物の2階までの被害にとどまったそうです。

復旧・復興の進む今は、私と同様、被災地を視察に訪れる方も少なくないようです。私が訪れた際には、秋の行楽シーズンでもあり、5階の高さにあり津波を免れたホテルのロビーは、お客さんで一杯でした。

通常は温泉や眺望を楽しむ観光客でにぎわうホテル観洋が、災害時の避難所としてきわめて快適な環境だったことは言うまでもありません。同ホテルは津波被害後、町内の避難者のうち、とくに子供連れの家族と経営者を中心に受け入れたそうです。

同ホテルは視察者向けの語り部バスの運行や被災した商店街のマップを作製するなど、交流を通じた南三陸町の復旧・復興の拠点となっています。

阿部女将は震災後の政府の支援が経営者に対しては薄いと感じているようでした。企業が被災し仕事ができなくなった場合、従業員には失業保険がありますが、経営者には同様の救済策がありません。

また、復興のため新しい企業が事業を始める際には免税などの措置がありますが、震災前から経営してきた被災企業に、まだ復旧復興途上にもかかわらず、固定資産税の納税を求められることさえあったそうです。

国からの補助金も、財産形成につながる、という理由で企業経営者へは原則として提供されていません。また、補助金申請に当たってグループ化が求められたり、多くの申請書を書く作業が必要だったり、復旧復興のための経営者の苦労は尽きません。

また、これまで企業家として地域のリーダーとしての役割を果たしてきた人が、生活保護を受給するというのは通常の人以上に精神的苦痛を伴うものです。

さらに、もうひとつ、阿部女将が憤っていたのは、復興予算が他の目的に使われているという報道に対してでした。テレビの報道で復興予算の一部が沖縄等で使われていることを知り、政府のあり方に強い疑念を抱いたそうです。復興予算は復興のために使ってほしい、というのは被災地に関わるすべての人の希望だと思います。

(丸岡泰)

被災した子供たちとのスポーツフェスタ

11月3日、石巻専修大学の陸上競技場で被災した子どもたちのためのスポーツフェスタが開催されました。これは被災地支援として県観光連盟に寄せられた人気グループ「嵐」の寄付金を活用し行われたイベントです。ここには、被災して学校のグラウンドが使えない子どもたち、人数がそろわず運動会を開催できなかった小学1年生から6年生が集まりました。

そしてこのイベントを成功させるために、石巻専修大学の野球部員と松島高校の学生も加わり、計120人となりました。さらに県の観光PRキャラクターである「むすび丸」も応援に駆け付けました。

参加した子どもたちと学生は青チーム、緑チーム、オレンジチームに分けられ、チーム対抗で玉入れや綱引き、一定の時間内で用意されたステージの上に何人乗れるかを競う「華のステージ」、リレーが行われました。

昼の時間には「むすび丸」をモチーフにしたお弁当が配られました。子どもたちの喜ぶ顔が印象的でした。

午後には県の観光や物産などに関する〇×クイズが数回行われ、最後まで残った子どもたちには景品として「むすび丸」のキーホルダーがプレゼントされました。

子どもたちの楽しむ顔を見ていくうちに、こっちもどんどん楽しくなっていました。何より子どもたちの笑顔から自分たちが元気をもらえた気がします。被災した子どもたちとの交流イベントを続け、触れ合うことでいろんな勉強ができると感じました。

(大瀧裕也)

「石巻ふねのアート展」の船出

慶長使節船出帆400年を記念し、11月11日から石巻専修大学5号館3階「学生ホール」にアトリエ・コパンの子どもたちの8作品を展示中です。ふねをテーマとするアート作品とその無料展示場所を募集しています。



*平成25年度共創研究センター研究プロジェクト「石巻港の客船歓迎行事を通じた体験型観光プログラム開発」事業（丸岡泰、清水義春、庄子真岐）